



(右) 折り鶴を再利用したノートを手にした川野さん。
(上) 川野さんの話を目頭を押さえる参加者。



暑くて暑くて溶けそうだった今年の夏。ここ数年新型コロナウイルスの影響でイベントが中止や縮小を余儀なくされていましたが、この夏はさまざまなイベントが開催され、多くの人が参加できました。そんな夏の思い出をカメラでスケッチしてお届けします。

夏のスケッチブック 2023

カメラスケッチ SPECIAL 1

『原爆の子の像』に託した願い

栄公民館

65年前に建立された平和記念公園の『原爆の子の像』。大きく手を広げ折り鶴を掲げる姿が印象的で、修学旅行生などが折った千羽鶴が奉納されています。そのモデルとなったのが、故佐々木禎子さん。広島市内で被爆後、白血病を患い12歳で亡くなりました。禎子さんと小学校で同級生だった川野登美子さんが語る思い出や、像の建立にまつわる物語に、14人の参加者は耳を傾けました。

川野さん自身も3歳で被爆。当時中学生だった兄を失っています。誰よりも足が速く運動神経の良かった禎子さんと、原爆で幼い命の灯を消されてしまった全ての子どもたちのための像を造ろうと、呼び掛けていった川野さんたち。3年間の運動が実を結び完成した像の話に、参加者が涙ぐむ姿もありました。「風化する」と歴史は繰り返す。忘れてはいけない。川野さんは被爆50年を機に語り部として活動しています。話を聴き終えた森本紀子さんは「語り部の方が減ってきた今、こういう活動は続けてほしい」と、感動さめやらぬ様子で話してくれました。



2



1

①「叫魂」碑に献納された折り鶴。②児童・生徒代表の折り鶴献納。③小方中学校吹奏楽部が式典の演奏。④丸山会長代行の式辞。⑤大竹高校生徒が司会を担当。



4



3



8



7



6



9

8/6 SUN

厳かに『大竹ヒロシマの日』

総合市民会館『叫魂』碑前

連日の猛暑が続く今年の夏。78年前、広島に投下された原爆は、大竹地域からも多数の犠牲者を出しました。『大竹市原爆被爆者協議会』も世代交代の時期を迎え、平和活動に関心のある若者の参加を期待し『大竹市原爆被害者友の会』と名称を変更。41回目となる『原爆死没者追悼・平和祈念式典』が、小方中学校吹奏楽部の『ひろしま平和の歌』の演奏で、厳かに幕を開けました。平和の歌の合唱、献水、この1年間に亡くなられた41柱を加えた2530柱の死没者名簿奉納と続き、8時15分の時を知らせるサイレンとともに黙とう。しめやかな空気に包まれます。主催者を代表して会長代行の丸山幸志さんは「原爆被害が風化することなく、正しく後世へ伝えられることを祈念します」と式辞で述べ、小・中・高校生各代表は、戦争の苦しさ愚かさを学び語り継ぎ、核兵器の脅威を訴えていくことが重要だと『平和への誓い』を表明しました。折り鶴献納、参列者の献花と続き、式典は幕を閉じます。司会進行を務めた大竹高校の米中真優さん（2年）と藤川侑正さん（1年）は、緊張の大役を終えひと息。「平和について考えるいい機会をいただきました」「こうした式典に参加することが平和な世の中にしていくためには大切」。そう2人は話してくれました。



10



11

⑨原爆投下時刻に黙とうする参列者。⑩「叫魂」碑に祈る参列者の列が続きます。⑪8時15分のサイレンとともに鎮魂のときが流れます。



7/27 THU

キラキラした目で観劇

市立図書館

廿日市市からやって来た人形劇団の皆さんによる人形劇を親子30人が観劇しました。名作絵本の『はらぺこあおむし』をはじめ、巣でエサを待つツバメの子どもたちと、子どもたちを狙おうとするカラスの話や、タヌキの子どもがいろいろな動物に化ける楽しい話に、子どもたちは食い入るように観ているようでした。劇の合間には手遊びで楽しませてくれ、ほのぼのとしたひとときを過ごしました。

劇団『人形劇コロコロ』の上演は4年ぶり。新型コロナの感染拡大により活動もままならず、ようやく再開することができました。結成40年の間には、団員も3人に減るなど苦難の時代もありましたが、現在は元保育士など9人で活動。代表の蒔田和恵さんは「子どもたちがキラキラした目で観てくれた」と喜びの表情で話してくれました。



8/1 TUE

自転車でのまちづくりに貢献したい

市役所

プロ自転車ロードレースチーム『ヴィクトワール広島』の中山卓士監督、柴田雅之選手が市長を訪問。チームは、県内の学校や企業で交通安全講習なども行っており、今後、交通安全意識の啓発、児童生徒への交通安全教育、そしてスポーツを通じたイベント開催など、社会教育の充実やにぎわいづくりに向けて協力していきたいと話しました。

7月8日にチーム選手が優勝を飾った三原市佐木島で開催されたロードレースの動画を視聴。献身的なアシストでチームを優勝へ導いた柴田選手の「自転車のスピードは最高では約70キロ、緩い坂道でも40キロは出ます」という言葉に市長、副市長も感嘆の声。中山監督は「将来的には、チームは広島、廿日市、大竹などと広域的にコラボして自転車でのまちづくりに貢献したい」という構想を語りました。

『夏のスケッチブック』は28〜29ページにも掲載しています。